

# ゴットハルト・ハイデッガーの小説批判

— 17世紀末の小説論争についての一考察 —

北原 寛子

## 1. 18世紀ドイツにおける小説Romanをめぐる状況

ドイツにおいて小説Romanは、19世紀以降もっとも代表的な文学的形式である。たしかに18世紀をとおして小説という散文体を中心としたある程度の規模を備えた作品は年を追うごとに多く創作されるようになり、中には今日にいたるまで読み継がれている名作も誕生している。このように小説の人気が増し市場が広がるとともに作品の質も上がっていったが、一方で批判や非難の声も決してやむことはなかった。今日から見返すならば、むしろこの厳しい意見が小説の質の改善と可能性の追求に向かわせたということもできるであろう。小説が近代ドイツの代表的な文学形式にまで成長した背景では、小説に対する批判的な意見に対して、伝統的な文学理論に則って小説を正当化する理論を構築しようと試みたり、あるいは個々の作品の文学的な価値を向上させたりすることによって克服しようとする文学人たちの努力が続けられていたのである。

しかし18世紀に小説が質と量の両面で右肩上がりに伸びていったにもかかわらず批判され続けたからと言って、その起点にあたる17世紀で小説の質が低かったわけではない。18世紀ドイツには、啓蒙主義的合理主義と、率直な宗教的感情を重んじる敬虔主義という一見正反対に思われる2つの大きな精神的潮流があったが、いずれにせよこれらの根底には質実剛健の気風が共通している。バロック時代の小説のおおらかさと破天荒さは、これらの傾向のいずれにも合致しなかったことが非難の要因になってしまったと考えられる。さらには小説が17世紀にフランスから流入した新しいジャンルであり、

伝統のジャンル体系の中にこれから位置づけなければならないという不安定な状況にあったことも、18世紀に小説が論争の対象となった要因の1つに挙げられるだろう。

小説Romanの起源については、Romanという名称とそれが指し示す内容の2つの面と、さらにその両者の統合という段階に分けて考えるべきである。名称と内容は別々の発展を遂げたので、両者を混同すると時代ごとの状況について見方を誤ってしまう恐れがある。

Romanという語の起源はフランス語にあるとされている。当初は学者のための言語であるラテン語と区別して民衆語によって記された書籍を指すために用いられた語で、「ロマンス語による」という副詞であるromaniceから派生した。<sup>1</sup> 1325年から30年頃にギヨーム・ド・ロリスによって創作されたとされる韻文の『薔薇物語』Le Roman de la Roseの例に見られるように、当初は韻文・散文という言語形式による区別がなされていなかった。民衆語で民衆のために書き記された作品という性格上、ラテン語からの翻訳作品や騎士道物語など娯楽的な物語が主流となり、これらの作品を総括する概念として定着していった。

一方、近代のRomanの形式につながる散文による一定の規模を備えた物語は、文明の東西を問わず、古くからいろいろな名称で存在している。神話や叙事詩との区別がどのようになるかが問題になるように思われ、実際それらの題材を基に自由に語りなおしたならば小説の範疇に含まれることになる。しかしここでは民族の宗教観や歴史などの文化的側面の強い伝承を完全に排除しないまでも、当時の人々にとっての娯楽的な要素が強いと推測される創作された虚構を多く含む物語を小説の起源の中心に想定することにした。

フランスで散文を主とする娯楽的な作品がRomanと称されることが一般化する

---

<sup>1</sup> Das Herkunftswörterbuch. Etymologie der deutschen Sprache. 4., neu bearbeitete Auflage. Der Duden in zwölf Bänden. Bd. 7. Mannheim, Leipzig, Wien u. Zürich 2007, S. 680.

のが17世紀前半ごろまでである。その後ドイツにこの語がフランスからの外来語としてもたらされ、それまで騎士物語Ritterbücherや騎士文学Ritterdichtung, 民衆本Volksbücher, 恋愛・英雄物語Liebes-, Heldengeschichte, 物語Erzählungと呼ばれていた作品が徐々にRomanの一種として理解されるようになっていく。<sup>2</sup> 18世紀ドイツにおいては、少なくとも小説Romanという名称は新規であるだけでなく、耳慣れない異国的な響きを含んでいたことは、当時のテキストを理解するうえで念頭に置いておかなければならない。<sup>3</sup> そのため、18世紀に入ってからヴィーランドの『アガトン物語』Geschichte des Agathon (1766/67) のように、現在Romanに含まれるとされている作品が表題にRoman以外の従来の名称を採用している例は多い。それにもかかわらず、詩論においてこのタイプのジャンルを指す語として採用されているのは小説Romanである。外来語ゆえにほかの類義語とはっきりとした区別が容易であり、なおかつ外国の作品に対して適用する可能性が最初から開かれていたために、近代において散文体の物語全体を指すジャンルの名称として多くの支持を集め、定着したと考えられる。小説Romanという語は大きく浸透しており、現在では散文で一定の規模のある物語の一般的な名称として定着しているので、その結果この用語の誕生以前にあたるギリシャをはじめとする古代の諸作品を指す際にも適用されている。このような現象は、間テキスト性（インターテクスチュアリティ）と呼ばれるものである。つまり、17世紀に近代小説が登場したことによって、16世紀や古代といったそれ以前のテキストを小説に分類することが可能になるのである。私たちが過

<sup>2</sup> ヴィルヘルム・フォスカンプは、Romanが小説の表題として採用されるのは1699年出版のアウトグスト・ボーゼ作『忠実なる女奴隷ドリス』がはじめだとしている。Vgl. Wilhelm Vosskamp: Romantheorie in Deutschland. Von Martin Opitz bis Friedrich von Blanckenburt. Stuttgart 1973, S. 8.

<sup>3</sup> 日本語の「小説」は、ある程度史実に基づくが、史実のように見せかけた、取るに足らない虚構の物語を含む物語を指す中国の稗史に由来し、『漢書』芸文志に最初の用例がみられるという。江戸時代には蘭学においてすでに訳語として用いられていたという。Vgl. 『精選版 日本国語大辞典』第二巻, 小学館 2006年, 605頁。入矢義高「小説 日本における小説の成立」, 『世界大百科事典』第13巻, 改訂版。平凡社 2005年, 452頁。

去を展望するとき、19世紀であろうが、中世であろうが、過去という同じ方向に位置することには変わりはない。しかしその過去の諸時代にも時間的な前後の隔たりが存在し、ルネサンスにとってバロック時代は未知の未来に含まれていたことを思い起こす必要がある。小説を観察する目的が過去から現在までの通史であるならば、現代の基準を過去に応用して整理することができるが、今回は17世紀末から18世紀にかけての小説についての論争を再構築しようとしているので、当時のドイツの人々にとって小説が外国からもたらされた語だという違和感や新機軸なイメージを呼び起こしたであろうことを考慮しておかなければならない。

小説Romanについては、語が中世のフランスで生まれ、形式と内容が合致するのが17世紀頃であり、ドイツには17世紀後半頃流入したという点を、当時の小説理論を考察するうえで前提としておきたい。

## 2. ユエ『小説起源論』とハッペルによるドイツ語訳

近代の小説は17世紀のフランスで登場したが、ジャンルの発展に伴ってこれを批判的に考察する理論も発生した。ここでは、そのうちの1つであるユエの『小説起源論』*Tarité de l'origine des romans* (1670) のハッペルによるドイツ語訳 (1682)<sup>4</sup>を取り上げて分析していきたい。これに注目した理由は、ドイツ語訳により比較的早い時期にドイツに流入したことが確認できるからである。

ピエール・ダニエル・ユエPierre Daniel Huetは1630年にフランス北東部ノルマンディー地方のカーンで生まれ、1721年にパリのイエズス会修道院で

<sup>4</sup> Pierre Daniel Huet: *Traité de l'origine des romans*. Faksimiledrucke nach der Erstausgabe von 1670 und der happelschen Übersetzung von 1682. Mit einem Nachwort von Hans Hinterhäuser. Stuttgart 1966.

以下引用に際してはおもにハッペルのドイツ語訳を編集の注釈を参照しながら使用する。H/Hと略し、頁数を併記する。

没したカトリックの司教である。<sup>5</sup> ユエは古典に精通して学識豊かであるとともに、文芸を愛好していた。今回考察の対象とする小説理論は、知人であるラファイエット夫人の小説『ザイード』の中にあわせて印刷される形で発表された。

一方エーベルハルト・ベルナー・ハッペルEberhard Werner Happelは、1647年にヘッセン州キルヒハインに生まれ、1690年にハンブルクで没した。官職につくことを目指しながら貴族や富裕な市民の下で家庭教師をしていたが、結局経済的な自立を目指して作家の道を選択した。彼は小説をいくつか発表しており、その1つが『島のマンダレル』である。ユエの論文の翻訳は、その小説のなかに、航海の途中に登場人物が語った内容として取り込まれている。<sup>6</sup> 本論で実際に分析の対象とするのはハッペルによるドイツ語訳であるが、ユエの原文を参照して検討するため、基本的にユエの小説理論として扱うことにしたい。

彼の小説理論は、前半の小説の定義と後半の小説の歴史という大きく分けて2つの部分から構成されている。後半の歴史の変遷についてのほうが詳細でボリュームがある。ユエは「[...] この形式は、最初オリエントで発見されたと言えます。つまりそれはエジプト人、アラブ人、シリア人、ペルシャ人を念頭に置いています」(H/H 107)と指摘しており、小説の原形は古代にさかのぼるという立場をとっている。そして「しかし、小説の起源を発見しただけでは十分ではありません。どのようにしてこれがヨーロッパに、とくにギリシャとイタリアに到達したのか、あるいはそれから残りのヨーロッパの国民に届いたのか、あるいは同種のものがどこかほかから伝来したので

---

<sup>5</sup> ユエの伝記については、次の記述を基にした。Vgl. Hans Hinterhäuser: Nachwort. In: P. D. Huet, a. a. O., S. 1\*-28\*. Friedrich Wilhelm Bautz: Biographisch-Bibliographisches Kirchenlexicon (BBKL). Bd. 2. Hamm 1990, S. 1126-1128.

<sup>6</sup> ハッペルの伝記については、次の記述を基にした。Vgl. Herbert Singer: Happel, Eberhard Werner. In: Neue Deutsche Biographie (NDB). Bd. 7. Berlin 1966, S. 644f. <http://daten.digital-e-sammlungen.de/00001/bsb00016325/images/index.html?seite=658>

はないかということを見てみなくてはなりません」(H/H 116)と続けて、古代から近代までの小説史を展開している。

最初はギリシャやペルシャの寓話Fabelから説き起こしている。イソップのみならずゾロアスター教の寓話にも言及があり、インドやペルシャを含む広範な地域と時代が念頭に置かれている。さらに当時はまだ解読されていなかったエジプトのヒエログラフによる神秘的なる記述も小説の源流の1つに数えている。その後話題になるのは、小アジアのイオニア地方で発達したミレトス風寓話である。この時期に活動した作家としてアリストテレスの弟子のクレアルコスという哲学者が恋愛物語を書いたことや、アントニウス・ディオゲネスによる『デュニアスとデルシリスの旅と愛』、サモサタのルキアノス、さらに『エチオピア物語』で知られるヘリオドスらの名が挙げられている。

ギリシャに続いて、ローマ人たちも小説を発展させたことをユエは指摘している。奢侈で知られたローマの植民地シュバリスの地名を挙げて、ローマ人たちはヴィルギリウスやオーヴィットの作品の例にあるように恋愛物語を好んだと主張している。この部分では小説Romanと寓話Fabelの違いについて、寓話は決して起こりえないような話であるが、小説は現実起こっていないとしてもありえそうに思え、起こりうるかもしれないという出来事を描いていると説明されている。(H/H 139f)

それに続く段落で、ローマ帝国の崩壊とともに小説のみならず学問も衰退したと説明されている。しかしその時代にあってもカール大帝について記した作品やマンモスのジェフリによる『ブリテン列王史』のように寓話のような歴史が成立したことを指摘している。さきに小説の呼称Romanの起源は中世の民衆語の書籍に対する呼び名にあることを述べたが、ユエもこの点を視野に入れており、11・12世紀頃の作品がラテン語でもゴール語でもなく、それらのまじりあった自然な口語であるロマンス語で語られていたことに注目している。ここからスペイン人たちがRomanの名の元にこれらの作品を理解していたと述べている。(H/H 142) そしてフランスの説話がスペイン

ではアラビアの恋愛文学と混じりあって発展し、のちにドン・キホーテの所蔵図書となる一連の作品が形成されたことを指摘している。イタリアでは小説が無学な人々にも受け入れられたことが説明されている。寓話的なものは人間の生まれながらの素質に合致するものであり、学のある読者にも受容されていったという。そして歴史から小説に転作されたり、歴史の体裁で寓話的教訓のこめられた小説が誕生したりしたとされる。中世には『アマデイス物語』や『ティル・オイレンシュピーゲル』が成立したことも言及されている。

ユエは、17世紀になると小説は隆盛を取り戻したと述べている。そこでは、読者としても作者としても社会的な自由を堪能できる貴族女性が大きな役割を果たしているという。オノレ・デュルフェの『アストレ』（1607-27）やスキュデリー嬢の『イブラヒムまたは名高きパシャ』（1641）、『アルタメヌまたはグラン・シリウス』（1649-53）、『クレリー』（1654-61）という今日でも読み継がれている名作が彼の時代の代表作として挙げられている。

このように、ユエの小説史は古代から彼の時代までを概観してまとめており、その規模はフランス語版では八折り版と思われる小さめの版に1ページあたり25行で構成され、全体で100頁弱である。この中に時代や地域でジャンルやテーマにどのような傾向がみられたのかについてもそれぞれ解説が加えられ、17世紀の知識人たちは、散文による文芸作品の歴史について今日と変わることない知識を有していたことがよくわかる。

その論文の中で最初に論じられているのが、小説とはそもそも何かという問題である。ユエは次のように定義している。

以前、小説Romanの名のもとでは、散文のみならず、韻文で書かれた作品も含まれていました。しかし今日小説と呼ぶのは、読者を教育し楽しませるための、技巧で飾られ、描写された散文による恋愛の物語です。私は、恋愛物語は小説のなかで極めて洗練された作品だと言いましょ。つまり、小説は飾り立てられた事柄で、それが本当の歴史／物語Geschichteとの違いなのです。散文で、この時代と習慣に合わせて仕上

げられているのです。小説は技巧を伴い、一定の規則に従っていなくてはなりません。そうでなければ規則も面白さもない、混乱したごちゃまぜになってしまうでしょう。小説のもっとも素晴らしい目的は、あるいは少なくともそうあるべきであり、読者がいつでもそれで想像すべきものは、いろいろな事柄や知識で教えを授けるということです。いつでも徳が称賛され、悪が罰せられなければなりません。(H/H 104)

ここで指摘されている特徴は3点ある。まず文体の問題である。それ以前では韻文が用いられていたとしても、17世紀に小説では散文体による記述が定着していることがわかる。この韻文・散文という形式の差を超えて小説を小説たらしめているのは、恋愛を主題としているという第二の点である。ユエにとって、恋愛をモチーフとすることは小説の本質的な定義と関わる重要な要素であったことがここから読み取ることができる。別の箇所でも、「[...]これにたいして小説は恋愛をその最も優れた題材にしており、国家や戦ごとについては、ごくたまに、偶然話題になるだけです」(H/H 106)と記しており、恋愛文学のための形式としての小説を強く打ち出している。ユエは、政治的な事件や英雄の活躍を、恋愛というモチーフを描くための単なる背景とみなしている。先に確認したように、散文文学の歴史的な変遷をふまえたうえで議論がなされているので、中世に騎士物語や創作された物語との境界があいまいな作品があったにせよ、作品のテーマが恋愛に限定されずに多様であった経緯についても十分な認識があったはずである。それにもかかわらず彼が小説のテーマを男女の愛に限定すると論じる態度から、彼の時代にはそのテーマが主流を占め、なおかつ良い作品が生まれていたために人々の期待も高かったであろう当時の状況がうかがえる。外的な出来事よりも人間の心の変化に重点を置くことは、洗練された語りの技法を求めていることでもある。この点はおおよそ100年後にドイツで心理描写を重んじる小説理論が主張されるようになる先駆ともみなしうる。しかしなぜあくまで恋愛にこだわる必要があったのかという疑問がわいてくる。それは小説の書き手と読み手

が貴族階級の有閑社交人であったため、彼らの関心や習慣、風俗が投影されたためと考えられる。この点がフランスの17世紀とドイツ18世紀の作品の傾向の根本的な違いといえる。

先に挙げた定義の部分で、小説は歴史と区別するために技巧Kunstを含むべきであると主張されている。この技巧は、言語的な修辞と出来事の誇張の2つにさらに分けることができるであろう。17世紀から18世紀にかけての詩論を検討するうえで大きな問題となるのは、歴史が今日とは異なる性格を帯びていることである。当時歴史は一般に教養のために読むものと考えられており、記述する際も教育的な効果を重視する傾向にあった。そのため、ある程度は事実に基づいているとしても、誇張や虚偽が混じりこむことが許容されていたのである。このような事情からユエが、「歴史は、一般に真実です。しかし虚偽の作品もあります。それにたいして小説はある程度真実ですが、全体に一般的に言って虚偽です。小説は真実が虚偽と混じりあっており、歴史は虚偽が真実に混じりあっています」(H/H 106)と述べていることも理解することができる。当時はなお、虚偽(あるいは誇張と今日われわれが考えるもの)の含まれる度合いによって小説と歴史を区別せざるを得ないという混乱した状況にあったのである。

ユエによる小説の定義のポイントの第三点目には、教育的効果があげられる。徳を称賛し、悪を貶す明確な勧善懲悪をうたっている。しかしこの単純な善悪の二元論は、論の最後の部分でもう少し複雑な解釈が施されている。そもそも小説を読むこと自体が間違った行為であり、非難するに値するというのである。(H/H 156f)「つまりそれら [=小説] は神への畏敬の念を減らせてしまい、人間を常ならぬ興奮状態に引き入れ、そして風紀を乱します」(H/H 157)と、小説が宗教心や日常の精神状態にも悪影響を与えることが認められている。しかしそれに続けて、「しかし、邪悪な人間が悪用することのできない、有用でよきものとは一体何でしょう」(H/H 157)と逆に問い返し、読者が堕落したとしても、それは小説の責任ではなく、読者本人の素質によるものだという論を展開している。恋愛の駆け引きや危険な罫は、

知るべきか知らざるべきかを問うのではなく、「若い人々がこのような興奮を知ることは、罪深いことには耳をふさぐために必要だともいえます。そして彼らは、どのようにして邪悪な罠から抜け出せるかを知るでしょうし、避けることもできます」(H/H 158)と、最終的には小説に教育的効果があると主張する方向に議論が向かうのであるが、恋愛の駆け引きを扱うことそれ自体は善悪の判断の対象とするべきではないという立場をとっている。論文の最初の定義部分は、いわば看板のようなもので、読者にわかりやすく立場を示そうとしたために、シンプルな善悪二元論を掲げたと考えられる。善を勧め、悪を退けるという態度は、道徳的な正当性を主張でき、より多くの支持を受けることが期待できる。そして、議論を進めるにつれて、本当に主張すべき意見へと、つまり小説には恋愛を描く自由があるのだという主張へ読者を導いていくという戦略であったと推測できる。

ユエの論文は、このように小説を擁護する立場からの見解であり、芸術や虚構には現実と異なる基準があると考えている点で、現在の私たちの意見と共通している。彼はカトリックの聖職者として、キリスト教的な考え方を守らなければならない立場にあったと同時に、芸術の愛好者として、小説という文学ジャンルの可能性をも広める主張をしているとみなすことができるであろう。宗教心と芸術への愛を分離させて共存させており、その点ではリベラルで進歩的な立場であったといえる。

### 3. ゴットハルト・ハイデッガーの小説批判

17世紀後半のキリスト教の聖職者がみな、ユエのように自由でリベラルな気風であったわけではない。彼が小説で恋愛を重視したことがドイツ語圏から反発を招いたのであった。スイスのカルヴァン派の聖職者ゴットハルト・ハイデッガー Gotthard Heidegger (1666-1711)<sup>7</sup>は、当時の小説への批判を、

<sup>7</sup> 伝記については、次の書籍を参照した。Vgl. Ursula Hitzig: Gotthard Heidegger - 1666-1711. Winterthur 1954.

しっかりと一冊の本にまとめてくれており、そのおかげで彼の意見は今日でも参照することができる。その著作は『ミュトスコピア・ロマンティカ』*Mythoscopia Romantica* (1698)<sup>8</sup> (以下『ミュトスコピア』)と題されている。このタイトルの由来となったギリシャ語はμυθοσκοπεῖνで、「小説についての架空の論述」<sup>9</sup>といった意味である。この書物の最大の特徴は、小説理論でありながら、小説を非難している点である。彼がこのためにペンを握ったきっかけは、「さて私は数か月前、親しい友人たちと会話していて、ローエンシュタイン氏の新しい作品『アルミニウス』<sup>10</sup>がきっかけとなり、小説の題材が話題になりました。この作品は、他の多くの小説と同様に、みなが賞讃し、とても有用であると言っています。この種の本を以前から嫌っている私にとっては、これほど耐え難いことはなく、むしろ分別があり、いつもは素晴らしく学識のある友人たちが、つまり私が正反対の態度を表明する必要もないのですが、私の大胆さを見せつけられることになり […]」(MR Vorbericht XXIX)と、友人たちと当時の人気の作品を話題にしている際に、小説称賛論に異を唱えようとしたことだという。彼はこの著作でおもにドイツ語を使用しているが、それは小説を愛読する一般人を読者に想定してのことであったと推測することができる。というのも、ハイデッガーの他の著作はラテン語が多数を占めており、彼は兄弟との私信でもラテン語を使用していたという。彼は博覧強記の人であり、引用された書籍数は約160に上ると先行研究で指摘されている。<sup>11</sup>

ハイデッガーの小説批判は5点ある。第一点は、恋愛を題材とすることへ

<sup>8</sup> Gotthard Heidegger: *Mythoscopia Romantica* oder Discours von den so benannten Romans. Faksimileausgabe nach dem Originaldruck von 1698. Hrsg. von Walter Ernst Schäfer. Bad Homburg v. d. H., Berlin u. Zürich 1969. 以下引用に際してはMRと略記し、頁数を並記する。

<sup>9</sup> Vgl. Anmerkung in MR 238.

<sup>10</sup> ダニエル・カスパー・フォン・ローエンシュタイン Daniel Kaspar von Lohenstein (1635-1683) による小説, *Großmütiger Feldherr Arminius oder Hermann* (1689-90)。

<sup>11</sup> Vgl. U. Hitzig, a. a. O., S. 32

の批判である。彼は次のように述べている。

さらに偽って主張されているところでは、小説は学ぶべきまさに純潔な愛を教え、賞讃しているといえます。これでもって、ユエが言うように、みだらな愛から耳をふさげるのだそうです。(MR 146)

しかし、ここで根本的に議論しなくてはなりません。さきに何度も述べたように、小説の主要なテーマは恋愛であり、これは主に教育してくれるのだそうです。しかしわれわれはここでこれを取り下げ、言わねばなりません、それは愛ではなく発情であり、いちゃつきなのです。それに愛という高貴な表題をひどい間違えでつけてしまっているのです。愛はもっと素晴らしいことであって、もしそれを小説が教えるとすれば、小説は世界で最高の書物になるのではないのでしょうか。(MR 148)

ハイデッガーはユエの名を挙げて、彼が小説は恋愛を描くべきであるとする点を批判している。ハイデッガーにとっての愛は、キリスト教的な友愛と隣人愛のことであり、異性間の愛であるエロスとは区別がつけられている。

(MR 158) 聖書にソロモンの雅歌におけるエロスの描写があることが言及されるが、その内容が厳密に特定できるものではなく、聖書は規模が大きいためにこのような記述になることもあるという抗弁がなされている。(MR 168) ハイデッガーは「というわけで、小説は不健康な本であり、そこでみだらな欲望と虚栄に満ちた情事に長けてしまうのです」(MR 122) と結論付け、ユエのように読者の素質によるものではなく、小説からの悪影響は看過せざるを得ないレベルであると訴えている。<sup>12</sup>

<sup>12</sup> ハイデッガーが恋愛のテーマを批判している箇所は非常に多く、その例を示すために、以下にさらに二箇所挙げておきたい。

・このことを定義するためには、とくに異論ないでしょう。どの点から見ても、小説は散文体で書かれた、恋人たちの、さまざまな不思議な出来事や偶然による想像された歴史です。そこで、信じられているのは、恋愛の物語が小説

ハイデッガーの小説批判の第二点は、キリスト教の教えに反した不敬虔さにあるという。

そこでようやく救い難い論題に行き当たるのです。つまり非キリスト教的で、心の穏やかさや風紀、考えの神聖さ（つまり純粋にキリスト教的な基準ですが）にとってきわめて有害で、まったく役に立たない嘘の書物についてです。それらは頭のいい人物のみならず、若者や世俗の人々、無為な女性たちにとっても価値がありません。とくにまた、一般にこれはとても面白いのが常でほかの小説を手にしてしまうので、該当の人物のみならず、その親方もろとも墮落させてしまうのです。(MR Zuschrift Vf.)

終わりに、兄弟たち、すべて真実なこと、すべて愛すべきこと、すべて名誉なことを、また、徳や賞讃に価することがあればそれを心に留めなさい。<sup>13</sup> というのも、この気品ある呼びかけにおいては、私たちに小説に適切な反対意見はないといういかなることばも保証されません。使徒が真実を勧める代わりに、小説は純粋に嘘のがらくたです。彼らはあの人が巨人を倒したというでしょう。しかしそんなものはどこにもいたためしはないのです。パウルの実直さを望む代わりに、これらは女性の胸を描写します。パウルが正しくあれと命じる代わりに、これらは殺人と決闘を賞讃します。[...] もしお話したことに従ってこれらの材料が投げかけるだけの考えが十分にわいてきたのなら、これで簡単に結論が

---

の一番素晴らしい題材であり、ユエが線引きしたように、これを専門としないのが寓話であって小説とは呼ばれません。この並びと構造については先で詳しくお話ししましょう。(MR 15)

・小説は（議論を続けると）、いまや牧歌の主人公や国家の歴史を主に扱っていて、大部分が恋愛と情事に関わるということになります。(MR 58f.)

<sup>13</sup> 『聖書 新共同訳』 日本聖書協会 1988年、(新) 366頁。「フィリビの信徒への手紙」4.8.所収。

導けますね。小説を読むことは、みすばらしい行為になるのです。(MR 60ff.)

ハイデッガーが聖書を引用している箇所訳は、新共同訳をそのまま引用した。信徒たちに説教台から直接呼びかけるように、わかりやすい言葉遣いと譬えを用いて、このような書物に手を出してはならないと主張している。小説が読者にとって魅力的であることを考慮したうえで、想像された世界の出来事はただの嘘に過ぎないのだから、そのようなものに心を動かされてはいけないと訴えている。

この敬虔な世界観は、ハイデッガーの小説批判の第三点である虚構批判にそのままつながっている。彼は「おや、まあ、私はここで何を読んでいるのだ。何に驚き、笑い、悲しみ、ため息をついているのだ。他人の夢や想像にじゃないか。この世に存在したことがなくて私を馬鹿にするために考え出されたことにじゃないか。どうして私は他人に夢なんか見させているのだ、どうして自分でちゃんと夢見ないのだ」(MR 72)という箇所からも読み取ることができるよう、随所で文学の基礎となる空想がこの世にあることではなく、価値のない幻に過ぎないと繰り返し主張している。「だって（と考えます）、疑いようもなく、重要に思えるのは、小説を読む人は、嘘を読んでいるということだな、と」(MR 71)という箇所は、その態度を端的に示している。彼はそもそも文学そのものの価値を認めていない。その起源に関しては、悪魔が快楽をうるための舞踊を打ち立てた後に人間は演説術や文章術を獲得したのであり、無神の規則が恋愛の美辞麗句のために打ち立てられたといい、文学は悪魔の技であると非難している。(MR 10f.)ハイデッガーにとっての世界は、神が存在し支配する現実のみであり、人間はその領域の中で神の秩序に従順でなければならないのである。

小説批判の第四点は、小説が時間を浪費することである。それについては、「大きなスズメバチが、羽をむしり取られたなら、同じ種に食いちぎられてしまうように、小説の書き手はまた、読者のよい時間を有害に浪費している

のです。というのも、そのような書物はだらだらと続いて、あちこち飛ばして読むことができず、ドラマ全体を秩序だて追いかけてはならないからです […]」(MR 63) というたとえ話に彼の態度がよく表れている。ハイデッガーは先に確認したようにカルヴァン派の聖職者である。カルヴァン派の信徒である質実剛健を旨とする市民にとっては、労働のための時間は貴重であり、フランスの大貴族のように無為と享楽に生きることは許されることではなかった。彼らが娯楽に許される時間に対して、小説は作品の規模が大きすぎ、そもそも内容にかかわらず、読書行為自体を許容することができなかったのである。

ハイデッガーは文学に対して嫌悪感をあらわにしていたが、その一方で歴史を読むことを積極的に評価した。この歴史と小説が比較の対象となっている点が、彼の小説理論の第五のポイントである。「歴史は読まなくてはなりません、これ [= 小説] は不要です。歴史は限りなく有用であり、危険もとても少ないです」(MR 131f.) と述べているように、歴史と小説は比較の対象であり、交換可能な代替物とみなされている。その理由は「これは第一の提案です。ほかの人にたいしては、いくら合理的にことを勧めたく、提案するのですが、素晴らしい時間つぶしは小説を読むことではなく、本当の歴史を、実際に起こった奇跡的なことを読むことです」(MR 214) という箇所で見ることができるよう、歴史が実際に起こったことであり、空想ではないので知る価値があると考えているからである。「歴史を読むことについては、羊の排泄物とナツメグと一緒に数えるときのように、小説を読むことにたいする防御であるように思われます。歴史を読むことは、小説をその対抗物として胡椒の包み紙かインクつぼの栓にしてしまえるし、そうなるはずだと信じています」(MR 69f.) とあるように、歴史を読んで満足できるなら、小説はくず紙として再利用してしまえるほど価値がなくなるはずだという主張がなされている。

堅実で実直な宗教心に立脚したハイデッガーの小説反対論では、現実の価値を重んじる態度の裏返しとして小説の虚構性を批判している。それが歴史

への高い評価となって表れており、一方では時間の無駄を排除して現実の生活に従事すべきであるという主張にもつながっていた。しかし、彼自身が虚構をこの批判に混ぜ込んでいるとすればどうなるだろうか。実際この本の中には、読者に自らの宗教心を問い直す必要を訴えるために、空想上の宗教裁判の場面が描き出されている。

私は自分に問うでしょう。私は誰。キリスト教徒だ、と答えます。おまえは嘘をついている、とキケロの弟子である裁判官は応えるでしょう。おまえはキリスト教徒ではない。おまえの宝があるところに、おまえの心臓があるのだ。[…] 主よ、お許してください、私をお許してください。とうとう死すべきものは裁判官の足もとに崩れ落ちる […] 主よ、と私は言います、もし私が世俗的な本をもっとたくさん所有していたり、読んでいたりしていたなら、私があなたをだましていたかのようにお考えになるのですね。(MR 44ff)

数ページにわたって続く最後の審判の描写は、題材が宗教的とはいえ、想像力による描写が半ば小説的である。キリスト教徒が天国への門前で裁判にかけられた時、隠していた小説が出てきてしまい、偽証によって断罪されるという場面が描かれている。彼はこのテキストを記述する際に、自分が「想像している」という行為をきちんと自覚できていなかったのではないかと推測される。小説の虚構性を否定しつつ、虚構を無意識に用いてしまっている点が、彼の認識の限界である。そこから、同時に近代人の認識には段階があったのではないかという仮説を立てることができる。神が現実と想像の世界の何をどこまで支配していると認識していたのかという問題が、小説理論を通して浮き上がってくるのである。ユエあるいはそれを訳したハッペルのように小説を擁護する立場では、小説が「想像上」のことであり、読んだところで必ずしもその内容に影響され、悪や怠惰に染まるわけではないという認識があったが、ハイデッガーにとって「想像」という行為自体が虚偽あるいは

幻という悪であり、現実、すなわち真実、に批判的に対立する要素として断罪の対象となっていたのである。

文学が虚構に立脚するという考え方は、アリストテレスの昔から変わることがない。それにもかかわらず、小説において虚構か否かが問いなおされなくてはならないのは、歴史が真実と虚構による脚色の間で揺れており、そのあおりを受けて自らの特性を再考することが求められていたためである。また、小説が17世紀になってようやく文学的形式として認知されるようになった新規さも、歴史の伝統に容易に打ち勝つことができない要因であったと考えられる。このように小説は、文学としてのあり方を常に問い直されていたのである。

#### 4. 小説批判に対抗するための言説の登場

17世紀の終盤に発表されたハイデッガーの小説批判は、恋愛のふしだらさ、不敬虔、虚構性、読書による時間の浪費、歴史と比較され劣る、という5点にまとめることができるが、これらはその後18世紀に100年続く小説批判の要約でもある。小説についての批判は論文のタイトルから拾うことが難しく、また筆を執って議論する人物はおおよそ文学愛好家であるために、そのほとんどが小説擁護論であり、小説批判がまとまって出現することがまれである。小説擁護のテキストから、仮想的に小説批判論を再構築するしかないので、ハイデッガーのテキストは近代ドイツでの小説批判の確かな根拠を提供してくれている点で非常に貴重である。

18世紀前半の小説に対する一般的な見解は、例えば次に挙げる当時の辞書の記述から推し量ることができる。

小説 *Roman* Fabula RomaniensisあるいはRoman。想像されているが本当らしい物語で、多くの予想もしない偶然によって満たされ、そしてさまざまな恋愛の出来事や騎士的なおこないが混ぜられており、最終的

に喜ばしい方向に向かう。トリカラの司教ヘリオドスは4世紀の人であるが、「エチオピア物語」という題名でそのような恋愛物語を生み出した最初の人である。それゆえに、彼のテアゲネスとカリクレア（彼の小説の主人公たちはこのような名である）にすべてのほかの小説が起因すると冗談で言われている。テュルパンというフランスの大司教は、みんなが思っているようにヘリオドスの後を追ひ、カール大王とローラントの英雄物語を同じような方法で描いた。このことが流行し、特にプロヴァンスでは、自分の思い付きでもって他の人々に勝ると考える聡明な頭脳の持ち主たちが現れた。スペイン人やイタリア人たちもこうしたことを学び取り、しばらくは翻訳によって協力していたドイツ人までもついに自らこうした作品の創作を始めた。小説を読むことが役に立つのか立たないのかは、意見は非常に多様である。無為な女性たちと知ったかぶりをする若い人々は小説のとりこになっている。思慮分別のある人々は、このような本を読むことは無為と異性ととの悪ふざけにつながるだけで、心がいろいろ刺激され続け、心地よい動揺状態にとどめられ、感情が虚栄心と誤った想像で満たされるといい、小説を評価していない。良心的な聖職者たちは、小説を若者にとってのペストで、穢れなき魂にとっての死にいたる毒であると、あるいは少なくとも罪深い時間の無駄遣いであるとして激しく非難している。たしかに、フランスやドイツに、そのような非難が該当せず、楽しみよりは敬虔さを抱かせるような作品を提供する優れた編者が若干いるが、しかしよい編者よりも無能な者たちが数で優っているのみならず、無能な者たちのほうが多くの人々から支持を受け、人気がある。『小説起源論』という気の利いた小冊子を、フランスの学識ある司教ユエは著している。<sup>14</sup>

<sup>14</sup> Johannes Theodor Jablonski: Allgemeine Lexicon der Künste und Wissenschaften. Zweyter Theil. Leipzig 1721. Text folgt Ernst Weber (Hrsg.): Texte zur Romantheorie I. 1626-1731. Mit Anmerkungen, Nachwort und Bibliographie. München 1976, S. 635.

このテキストが辞書の項目であるということから、18世紀前半の小説に対する一般的な意見として参考にすることができるであろう。ギリシャ時代の散文による文芸作品が近代小説の起源とされているという意見は、ユエの論文でも確認できたが、この辞書の記述では、ギリシャ時代からはヘリオドスによる『美しきカリクレアの冒険』（あるいは『エチオピア物語』）が典型的とされている。この作品は18世紀初頭のドイツでも受容され、小説の典型的で模範的な作品とみなされていた。<sup>15</sup> これらのポイントは、ユエとハイデッガーという2人の対立する意見のなかでも大方出そろっていた項目である。ドイツ近代小説理論は、17世紀末に原形が登場したということができる。そしてその後この批判を克服するために1世紀もの時間を要することになる。その必死の議論を通して、非常にオリジナルな特徴が誕生し、それがさらに現代にまで継続することになる。ドイツ近代小説理論は、さまざまな論者によって受け継がれ、今日に至るという点で、稀有な総合的文化活動であるといえる。

本研究は、以下の科研費の支援を受けた研究プロジェクトの一環である。

〔課題番号〕 26770115／〔研究種目〕 平成26年度 若手研究 (B) ／〔研究代表者〕 北原寛子／〔研究課題〕 18世紀から現在にいたるBildungsroman概念の展開に関する文献学的研究

JSPS KAKENHI Grant Number 26770115

---

<sup>15</sup> Vgl. Dirk Niefanger: Barock. Lehrbuch Germanistik mit 8 Abbildungen. 3., aktualisierte und erweiterte Auflage. Stuttgart u. Weimar 2012, S. 205.